

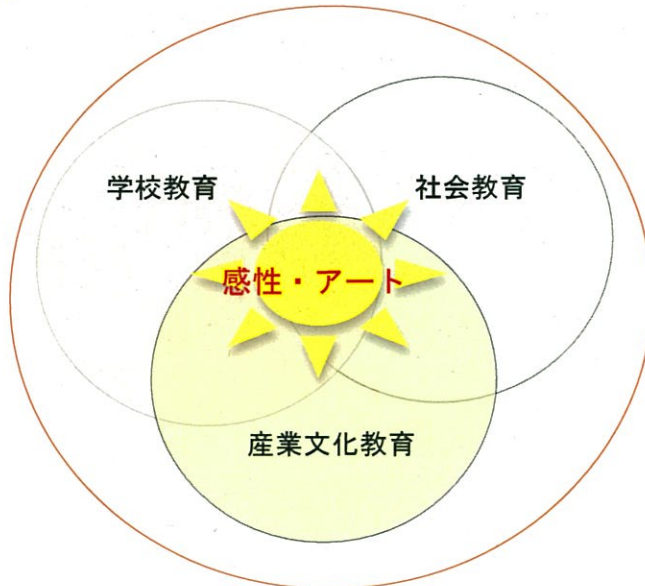
第13回教育懇談会（平成28年8月16日）

「子どもたちの感性を育む芸術・文化教育について」

藤江充（愛知教育大学・名誉教授）

mfujie0001@me.com

構想図



1. 学校教育と社会教育←生涯学習社会

○学校と美術館の連携→学習指導要領の改訂(平成10年)

例) 愛知県美術館 鑑賞学習交流会

文化庁支援→教材開発「あいパック」(鑑賞学習セット)

- ・「愛知トリエンナーレ」教育部門の活動
- ・県立盲学校との交流→触擦教材作成
- ・十四山東部小学校の実践など



□提案1 「アーティスト・イン・スクール」「アーティスト・イン・レジデンス」の制度化

自治体が芸術家を招いて生活費や仕事場を保証するかわりに、芸術家は、学校や地域の集まりに出かけて演奏したり制作したり、実技指導を行ったりすることで、芸術家の育成と学校教育支援を目指す。北米ではシステムが確立されている。日本では、文化庁「文化芸術による子どもの育成事業・芸術家派遣事業」(各県20~40名くらい)があるが、音楽、伝統芸能が多い。瀬戸市では外国の陶芸、ガラス作家を招くプログラムも実施されている。

トリエンナーレの継続事業と関連させて、1年程度のスパンで外国(東アジア、東南アジアなどを含む)から招聘する。芸術家は学校などに出かけ、自国の伝統文化を紹介したり、ワークショップをしたりしながら、トリエンナーレに作品を出品する。グローバル化の中でも異文化理解にもつながる。日本在住芸術家に関しては、県美術館による「ARCH」や「アーツチャレンジ」の企画を財政的・期間的に充実・発展させることも考えられる。

□提案2 学校と美術館との連携推進のポスト設置

学習指導要領に示された「地域の美術館などを利用したり連携を図ったりすること」（図工）や「美術館・博物館等の施設や文化財などを積極的に活用するようにすること」（美術）を進めるために、愛知県美術館、愛知県陶磁美術館、芸術文化センターなどに、館やセンターと学校との接続役となる学校の教員（現職、または OB・OG）ポストを置く。近くでは三重県立美術館、岐阜県立美術館、さらに山梨県立美術館、青森県立美術館、宮崎県立美術館などにも、こうしたポストがある。

2. 「産業文化」と教育 アート×テクノロジー

愛知の自動車産業やロボット産業の底流にはカラクリ人形などのメカニックに興味をもつ県民性があったともいわれる。「愛知の教育ビジョン2020」でくめざす「愛知の人間像」>の1つに＜【あいちを創る】あいちの伝統と文化、「ものづくりの精神」を継承し、新たな価値を生み出すことのできる人間＞がある。各地に「産業文化会館」が設置され、「産業文化」という考え方も定着してきた。一般的には、「産業の振興及び、市民の文化の向上と福祉の増進を図る」とされるが、豊田市の「産業文化センター」では科学館も併設されているなど、事業内容は多様である。高校の窯業科などは産業文化教育の事例といえよう。

かつて名古屋市美術館と名古屋市科学館とが共催で「ARTEC（アーテック）」という、アートと最新テクノロジーとが融合した作品展があった（1989～1997年）。スポンサーのIT企業が降りたこともあり中止された。人工知能（AI）がすべての自動車産業をはじめあらゆる産業の要になりつつある現在、あらためて＜テクノロジーをアート化する感性、アートをテクノロジー化する感性＞が求められている。そのためにメディア・アートの教育が必要である。

□提案3 「メディア・アート」教育の推進

・メディア・アートは、米国のいくつか州やオーストラリア、イタリア、スペインなどで独立した教科となっている。わが国の「文化芸術振興基本法」（平成13年）でも「メディア芸術の振興」を図ることが示され（第九条）、「地方公共団体は、…その地域の実情に応じた文化芸術の振興のために必要な施策に推進を図る」（第三十五条）とされている。2002年には、米国向け輸出で、アニメ関連が鋼鉄輸出の4倍の5200億円に達したという（朝日新聞、2003年7月20日）ことも、アニメなどのメディア・アートが重視される背景にある。

大学レベルでは、筑波大学の芸術専門学群「総合造形領域」、東京芸術大学美術学部「先端芸術表現科」などが対応する。トリエンナーレにもメディア・アート系の作品が多数、出品されている。瀬戸窯業高校にも「電子機械科」がある。愛知県立芸術大学でも大学院レベルで、音楽、美術、舞台芸術などを総合したこうした総合的な専攻分野が必要ではないか。

3. 芸術・文化教育と学校教育

○愛知県の学校教育に関する諸問題や課題は、教育懇談会でも多方面から議論されてきたと思う。ここでは、芸術教科の問題に焦点化する。学校教育は、「学習指導要領」に基づいて運営されてい

る。芸術教科・科目も例外ではない。音楽科と図工・美術科は、それぞれに同じ時間数が示されてきたが、学習指導要領の改訂のたびに、相対的に時間を減らされてきた（資料1）。表1は、小学校と中学校の総授業時間数に占める音楽と図工・美術の割合を示したものである。

表1 音楽科と図工・美術科が、総時間数に占める割合（%）[藤江作成]

	時間数	昭和 33	昭和 44	昭和 52	平成元	平成 10	平成 20
小学校	総時間	5821	6135	5785	5785	5367	5645
	音楽・図工	452	452	418	418	358	358
	割合（%）	7.76	7.36	7.22	7.22	6.67	6.34
中学校	総時間	3360	3535	3150	3150	2940	3045
	音楽・美術	140	175	140	140	115	115
	割合（%）	4.16	4.95	4.44	4.44	3.91	3.77

* 平成元年は中美の選択を含む

ただ、児童・生徒の好きな教科では、図工・美術と音楽はつねに上位をキープしている。国立教育政策研究所（「国研」）の調査ではそれぞれの教科の調査ごとに、その教科の学習が好きかどうかをたずねるが（資料2）、学研調査では、各人が1教科だけを選択する形である（資料4）のでブレがあるが大きな傾向は変わらない。平成27年に公表された国研の児童質問紙調査では、体育が含まれていないが、図工が好きな児童が多い（資料5）。「感性を育む芸術・文化教育」を促進するためには、学校生活の中で多くの児童・生徒が好きだとしている芸術教科の時間数と指導に専念できる教員の確保が求められる。

授業時間数の減少により、中学校の音楽・美術科担当教員の指導する生徒数は膨大な数になっている。週18時間以上授業という規定からいえば、たとえば全学年4クラス（1クラス平均30人として）の学校では一人の教員が360人以上を指導・評価しなければならない。

高等学校に関しては、愛知の教員一人当たりの生徒数、15.5人は全国1位である。人口流入のスピードや世代構成などの他県とは異なる事情もあるが、教員の増員が必要である。特に芸術教科の担当は、8割以上が非常勤講師である。芸術という教科が4つの科目（音楽・美術・工芸・書道の4科目）に分かれているという特殊性もあるが、正規採用の枠が少なすぎることも一因である。芸術系大学に進みたい生徒が進路相談もできない状態である。

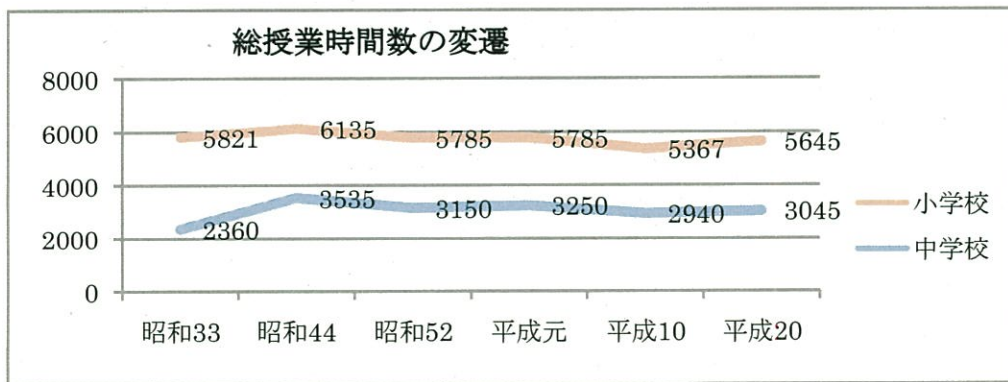
□提案4 高校の芸術教科担当の専任教員の採用枠を広げる

これからの愛知県を支える児童・生徒の豊かな感性を育む芸術・文化教育の基盤は、学校教育にある。授業だけでなく教科外活動や学校行事などで、音楽や美術の教員が果たすべき役割は、非常勤講師では対応できない。メディア・アートの推進にも、必要な施設・設備の管理運営をする専任教員が必要となる。

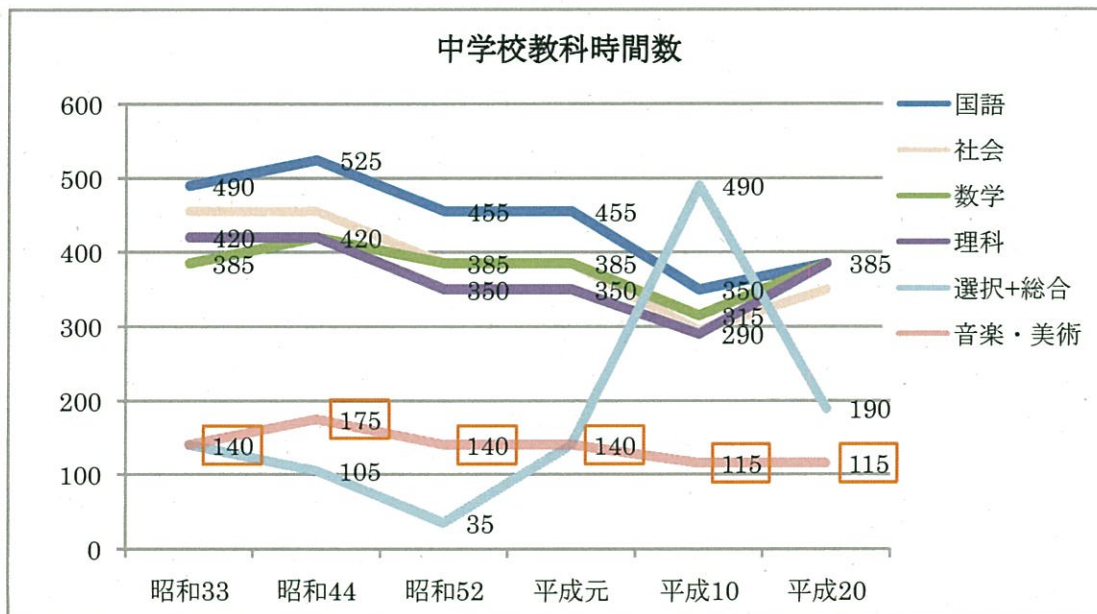
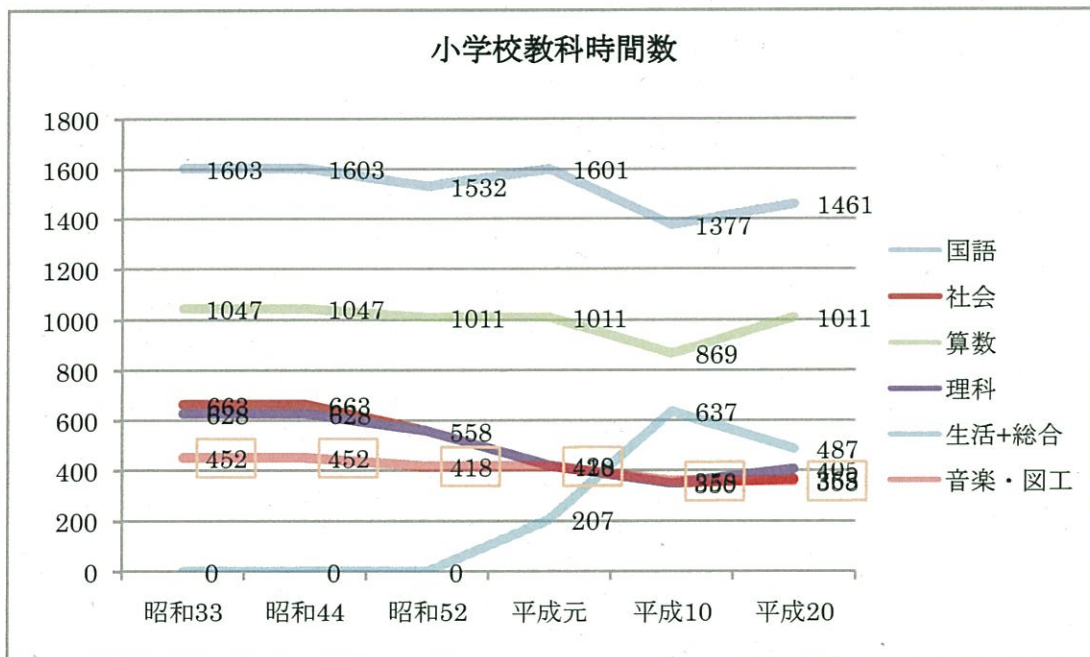
4. まとめにかえて

以上の現状認識と4つの提案は、限られた見聞と判断である。できるだけ具体的な事例と提案を心がけたが、その焦点化が視野を狭めたかもしれない。

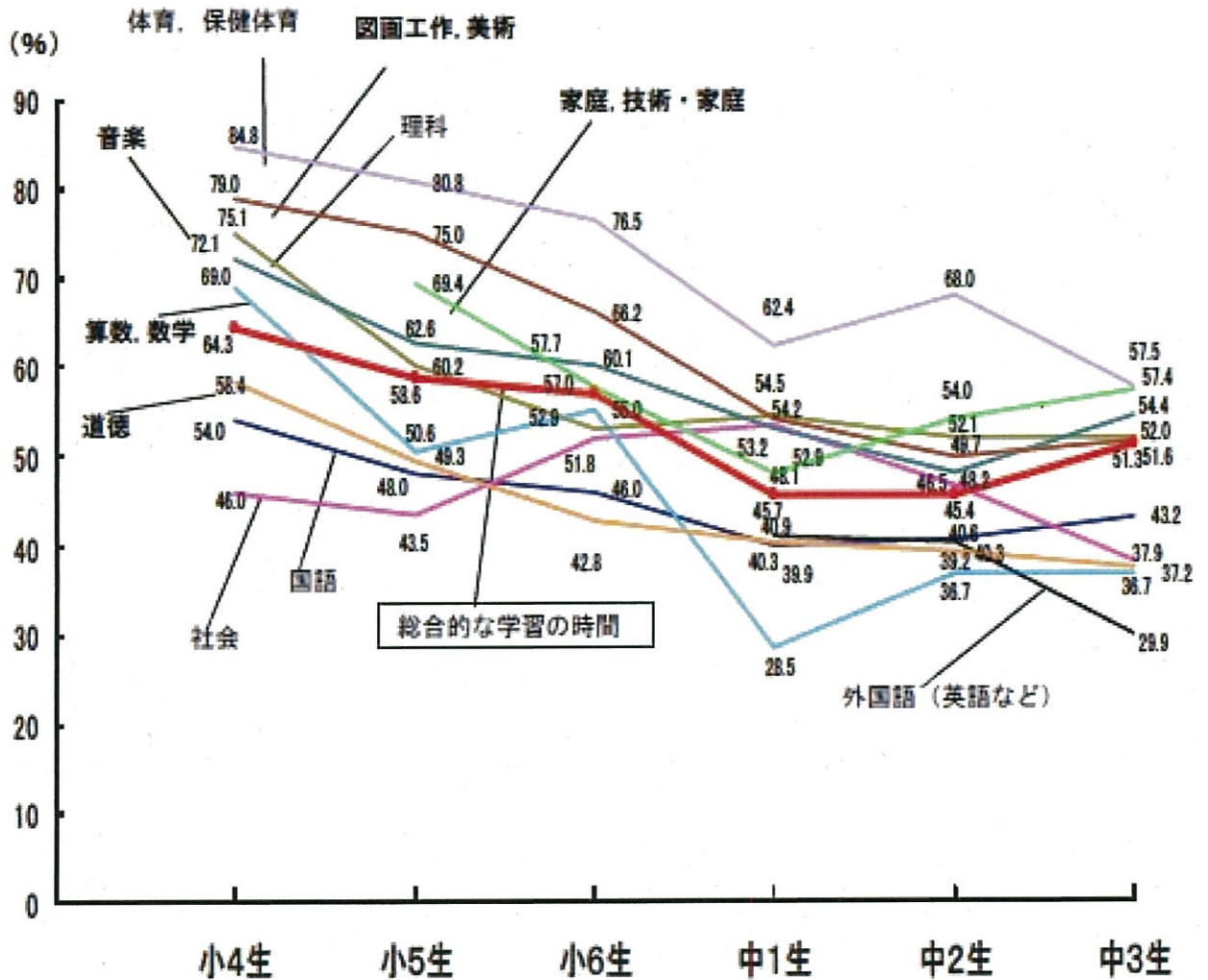
○授業時間数の変遷 **資料1**



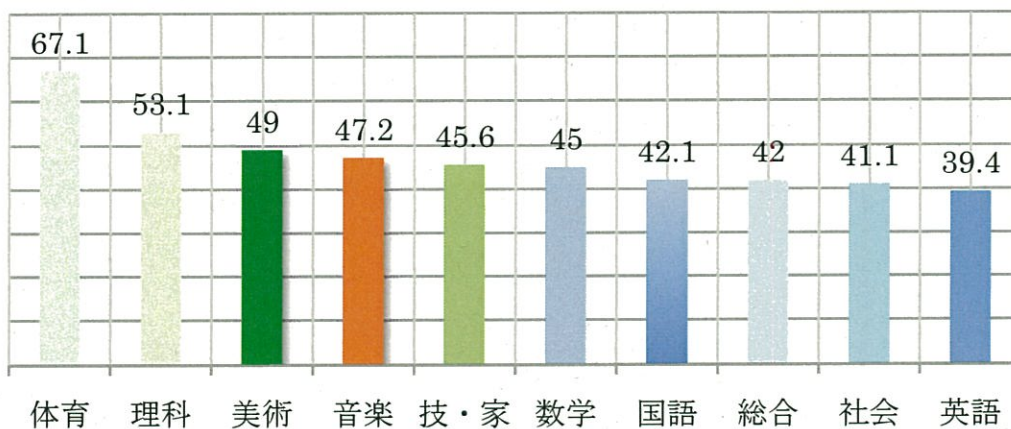
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/07061432/005/001.htm



(参考) 教科等の好き嫌い (「とても好き」「まあ好き」の合計)



http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/gakukihon4/chu/hon2_1_1.html



○学研教育総合研究所（2013年調査）「小学生の好きな（嫌いな）教科」資料4

<http://gakken.co.jp/kyouikusuouken/whitepaper/201409/chapter5/01.html>

【表N-1】「好きな科目」トップ5（全体）

順位	好きな科目	全体(N=1236)	
		人数	%
1	算数	273	22.1
2	体育	259	21.0
3	図画工作	206	16.7
4	国語	148	12.0
5	音楽	99	8.0

【表N-2】「好きな科目」トップ5（男子全体）

順位	好きな科目	男子(N=618)	
		人数	%
1	算数	180	29.1
2	体育	163	26.4
3	図画工作	90	14.6
4	理科	66	10.7
5	社会	35	5.7

【表N-4】「嫌いな科目」トップ5（全体）

順位	嫌いな科目	全体(N=1236)	
		人数	%
1	算数	283	22.9
2	なし	235	19.0
3	国語	224	18.1
4	体育	116	9.4
5	社会	85	6.9

【表N-3】「好きな科目」トップ5（女子全体）

順位	好きな科目	女子(N=618)	
		人数	%
1	図画工作	116	18.8
2	国語	115	18.6
3	体育	96	15.5
4	算数	93	15.0
5	音楽	91	14.7

○平成27年国立教育政策研究所発表データ 資料5

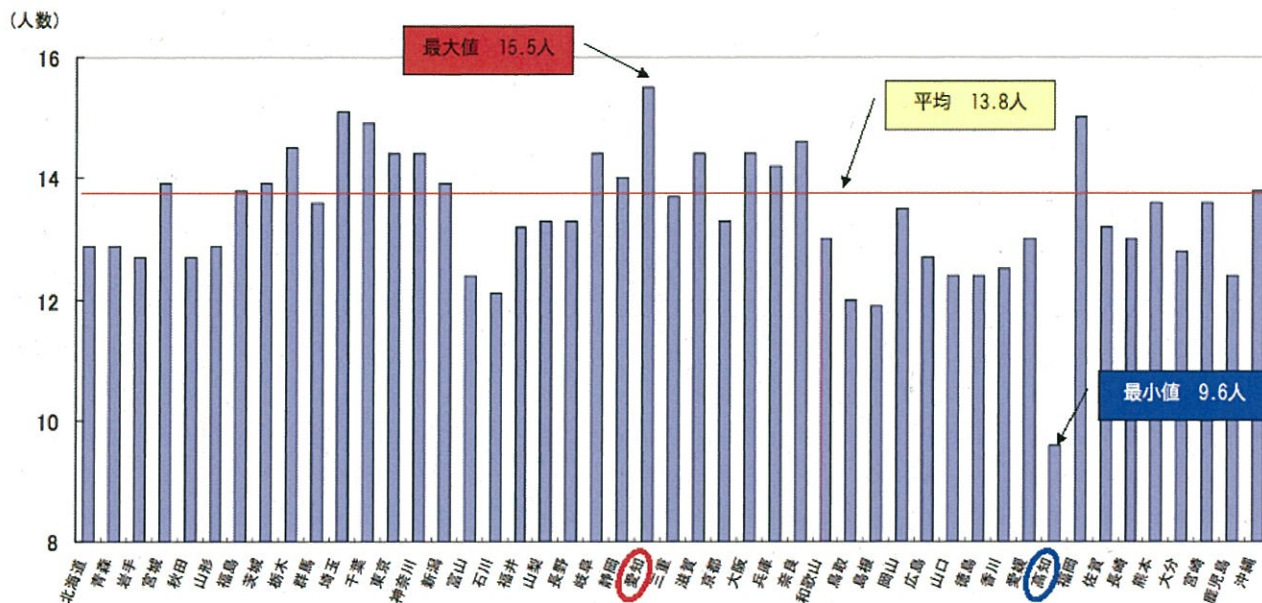
小学校 学習指導要領実施状況調査（児童質問紙より）						
国立教育政策研究所 平成25年2～3月調査						
「○○（教科名）の学習が好きだ」と回答した児童の割合（%）						
	思う	どちら か いえ ば 思う	「好き」 計	どちらか い え ば 思 わ な い	思わ な い	わか ら な い
国語	19.7	34.7	54.4	15	5.3	5.3
算数	29.2	27.4	56.6	21.2	17.4	4.7
理科	40.4	31.7	72.1	15.2	9.1	3.3
社会	32.8	30.4	63.2	19.3	13	4.1
音楽	39.4	28.7	68.1	15.7	12.3	3.7
図工	55.8	24.5	80.3	9.8	7.4	1.9
家庭	41.5	33.3	74.8	12.9	8.3	3.4

<http://www.nier.go.jp/kaihatsu/kyouikukatei.html>

○文科省「学級編制及び教職員定数に関する資料（公立高等学校関係）」 資料6

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/029/shiryo/05072002/002.pdf

公立高等学校の都道府県別教員1人当たり生徒数



○愛知県立高等学校（全日制）の教科担当教員の内訳（146校 9,870人） 資料7

深谷和義「愛知県立高等学校における職名別での教員配置の現状」『椋山女学園大学研究論集（社会科学篇）』第46号，20015，pp. 209-218， <http://web.sugiyama-u.ac.jp/~kfukaya/2015kfukaya.pdf>

